

京都大学	博士(文学)	氏名	武内康則
論文題目	契丹語の研究		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>契丹語は、10世紀に中国の東北部において遼を建国した民族が使用した言語であり、現在は死語となっている。契丹語の言語資料としては、遼の正史である『遼史』などの漢文資料に漢字で音写された語彙があるほか、契丹文字によって記された資料が存在する。現在までの研究によってモンゴル諸語と親縁関係を有する言語である事が確認されている。本論文は、契丹文字によって表記された契丹語および同時代の中国語漢字音によって音写された契丹語の語彙を資料にもちいて、契丹文字の音価、契丹語の音韻体系、さらには契丹語の文法について可能な限り包括的に扱ったものである。</p> <p>契丹語・契丹文字についての研究はすでに19世紀に始まっているが、20世紀に入り契丹文字で書かれた哀冊が発見されると、契丹文字の解読が学界の課題となる。その過程で、契丹文字には基本的に表意文字からなる契丹大字と表音文字からなる契丹小字の2種類の文字の存在が確認された。中でも1970年代に中国の契丹文字研究小組が、中国語の音写に用いられた契丹小字の要素を特定し、それら400ほどの要素（一般には原字と呼ばれる）のうち200ほどの音価の推定に成功したことは特筆される。こうして解読の糸口が発見されたかに見えたが、その後の進展は遅々としていて、多くの研究者たちの努力にもかかわらず、契丹文字及び契丹語は未だに十分解明されていないというのが現状である。そのような現状に於いて、本論文は論者が卒業論文以来行って来た、契丹語および契丹文字に関する研究を最新の成果を中心にしてまとめたものである。</p> <p>論文は研究編である本論と資料編である付録からなる。</p> <p>以下に本論と付録の内容を紹介し特筆すべき貢献について解説する。</p> <p>第一章では、契丹語の親縁関係や、主な言語資料、歴史書に散見する契丹語契丹文字についての記事をまとめたあとで、研究史に関して簡単な解説を行う。このなかには、1950年代にキルギスで発見され、最近になってサンクトペテルブルグの東洋文献研究所でその所蔵が確認された契丹大字の冊子本の紹介や、モンゴル共和国で発見され論者が解読に参加した契丹大字の碑文も含まれている。</p> <p>第二章では、契丹小字の文字組織について述べる。契丹小字は大字と比較して資料も多く研究もより進んでおり、本論文でも中心的に扱うのは契丹小字である。契丹小字は漢字と同様に縦書きで右から左に行を進める。ひとつの文字に見えるものが、実際にはハングルのようにいくつかの原字を組み合わせたものである。400個ほど確認される原字は、おおむね音節文字であるが、母音のみ、子音プラス母音、子音プラス母</p>			

音プラス子音、母音プラス子音などさまざまな種類がある。第一章と第二章は本論文全体の序章ともなっているが、契丹文字についての最新のもっとも要を得た解説になっている。

第三章は、本論文の中核となる部分であり、契丹語を研究するための基盤となる契丹語の音韻についてさまざまな方向から考察を加えている。契丹語の音韻の再構は、契丹文字と漢字による表音資料を基礎的な対音データとして行われる。対音データは大きく2種に分けることができる。ひとつは、中国語の発音を契丹文字によって表記したものであり、もう一つは漢字によって音写された契丹語の語彙のうち、契丹文字による表記が特定されたものである。

契丹小字で表記された中国語の発音は、契丹語の音韻体系にある程度適応したものであったと考えられるので、中国語のどの音韻の対立が契丹語において弁別的・非弁別的であるのかを暗示する。これに対し、漢字による契丹語の音写は、契丹語の音声中国語話者にどのように認識されたかを反映し、契丹語の音素の音価を推定するのに重要な情報を与えてくれる。第3章で特筆すべき点は、論者が契丹文字資料と漢字音写という2種類のデータに対して構造主義言語学の手法を組織的に援用して分析を行っていることである。これは論者の研究方法とその他の研究者たちの研究方法が決定的に異なる点であり、かつ論者が優れている点である。

契丹文字で表記した漢字音の分析では、はじめにその前提となる当時の中国語の音韻について述べ、中国語の声母及び韻母と契丹小字との対応から契丹語の子音体系および母音体系の再構を試みている。その一例を紹介する。

中国語の喉音声母の表記は、声母と契丹文字の対応が複雑であるために先行研究ではそのシステムが解明されていなかった。論者は14世紀のモンゴル文字による中国語音の表記や、契丹語とモンゴル諸語との同源語の比較を通してこの問題を検討している。そして漢語の初頭音を契丹文字で表記する際、後続する母音の等位によって文字を使い分ける現象は軟口蓋摩擦音についてのみ観察されることを明らかにした。それによって契丹語の軟口蓋音の子音調和はウイグル語のそれとは異なり、モンゴル語に見られるものと同じである事を解明し、その同じ子音調和がパクパ文字の体系にも反映していることを指摘した。

漢字で表記した契丹語の分析では、先行研究が考慮しなかった語中での音素の配列にも注目している。これらの音写語における漢字の初頭音の特異な分布は、契丹語における語頭・語中での音声的な特徴を反映していると言える。語頭においては有気音・無気音のどちらも出現するのに対して、語中では有気音の出現は極めて限られている。契丹小字によって表記された中国語音は契丹語にはそれぞれの調音点に2種の阻害音があったことを示唆するが、その対立は語頭でのみ存在していた可能性が高い。なお従来の研究では、契丹語を漢字で音写した資料として唐以前に成立した音写語も含まれていたが、論者はそれらを排除した上で立論している。音写の基礎となる漢字の発音体

系が異なるので当然の配慮だが、先行研究はその点について必ずしも慎重ではなかった。

第三章ではモンゴル諸語と契丹語の子音についての組織的な比較も行われる。母音間の有声子音の脱落等はよく知られた現象ではあるが、この現象を契丹語のデータから網羅的に抽出して分析を加えた意義は小さくない。

このように論者は、契丹語という十分に解読されていない言語に対しても生きて話されていた言語としてこれを考察の対象にしようとしている。文献言語学者としてのこの一貫した研究態度は、残りの三つの章にもよく現れている。従来はモンゴル諸語と親縁関係があるという認識から、形態論や統語論が契丹語研究の中心的なテーマになることはなかった。しかし論者は従来知られている事を、一つの言語の文法の総体を提示するという観点でまとめ直し提出している。これにより、契丹語という言語について音韻論以外の分野で、どのような現象が知られ、またどのような現象がまだ分かっていないかが一目瞭然となった。

第四章では、形態的・統語的分布に基づいて契丹語の語類について記述する。ここで扱われた語類は、名詞、代名詞、指示詞、形容詞、数詞、副詞、動詞である。名詞や形容詞等の名詞類は性の区別を有し、数と格による変化を行う。動詞については、定動詞となる場合は接語によって主語の数・性を標示することなどが述べられる。

第五章では、契丹語の形態論が扱われる。主に名詞及び動詞について考察を加えている。名詞の形態論的屈折は、数及び格の変化からなる。これらを標示する形態素は「数」「格」の順で語幹に付加される。契丹語の数には「単数」と「複数」の区別が存在する。少なくとも、主格、具格、位格、奪格、属格が存在しそれらの格の表示に用いられる接語について述べる。契丹語では動詞に、語根-使役・受動-時制=数=性の順で接尾辞・接語が付加されうる。数や性が標示されない場合は副動詞として動詞句を修飾するために用いられる。数や性が標示された場合には、定動詞として文を終止させることができる。また、形動詞として名詞句を修飾することができることなどが記述されている。

第六章では、構成素順序・コピュラ・項の増減・従属節の扱いなど契丹語の統語的特徴について、現在まで解読された契丹語の文に関して可能な限りの分析を行う。構成素順序について、契丹語は典型的なSOV言語であり、従属要素は主要部に先行する。即ち、所有者、形容詞的要素、関係節などのほとんどすべての名詞修飾要素が主要部名詞に先行する。文の構成原理以外にも、名詞類や動詞類の活用形の文中の用法等についても論じている。必ずしも多くが分かっている訳ではないが、その網羅的な取り扱いの特筆されるべきであろう。

本論の後に添えられた付録は6種類ある。それらは、1. 契丹小字で表記された漢語音一覧、2. 漢字で音写された契丹語に対応する契丹小字の表記の一覧、3. 漢字で音写された契丹語一覧、4. 契丹小字碑文の電子テキストにもとづく校訂テキスト、5. 小字

原字総表, 6. 契丹小字表記の契丹語語彙集である。これらは, 本論文を執筆するために論者が独自の観点で整理し直したデータであり, 今後契丹語を研究する上での基礎資料になるものである。従って今後の研究に対する貢献は本論に勝るとも劣らない。とりわけ付録1は, 本論の議論に用いられた契丹文字による中国語の表記のすべてを, 現代中国語の発音順にならべ出現箇所を附したリストであり, 中国語の音韻史を研究する上でも利用できるきわめて重要なものである。

以上のように, 論者は本論文において, 契丹語に関する先行研究の成果を批判的に検討した上で, 論者が新たに整理し直した質の高いデータにもとづき言語学的手法を用いて分析することによって, 先行研究の到達点を越え数多くの新知見を付け加えることができた。

(論文審査の結果の要旨)

契丹語は、10世紀に中国東北部において遼王朝を建国した民族が使用した言語であり、現在は死語となっている。契丹語の資料としては、『遼史』などの史書に漢字で音写された語彙があるほか、契丹文字によって記された資料が存在する。従来の研究によりモンゴル諸語と親縁関係を有する言語である事が確認されている。本論文は、これらの資料を用いて、アジアの未解読文字の代表である契丹文字の音価、契丹語の音韻体系、さらには契丹語の文法について可能な限り包括的に扱ったものである。

契丹語の研究は19世紀に始まっているが、20世紀に入り契丹文字で書かれた哀冊が発見されると、契丹文字の解読が主要な課題となる。(ちなみに契丹文字には大字と小字の2種類が知られており、ここで契丹文字という場合は、表音文字である契丹小字をさす。)1970年代に中国の研究者たちが、漢字の音写に用いられた契丹文字の要素を特定し、それら400ほどの要素(一般には原字と呼ばれる)のうちの200ほどの原字の音価の推定に成功し解読の糸口が発見されたかに見えた。しかしその後の進展は遅々としていて、多くの研究者たちの努力にもかかわらず、契丹文字及び契丹語は未だに十分解明されていない。そのような現状に於いて、本論文は論者が卒業論文以来行って来た契丹語研究を、最新の成果を中心にしてまとめたものである。

本論文は、契丹語の音韻、形態、統語論を分析し記述した全6章からなる本文以外に、本論の研究に用いたデータが付録として添えられている。以下に本論文の内容を紹介し、特に重要な貢献について解説する。

第一章と第二章は論文全体の導入として位置づけられる。契丹語・契丹文字の資料および研究史についての解説を含む第一章と、文字の成立や使用に関する歴史資料の記事、現在までに判明している表音組織に関してまとめた第二章は、契丹文字に関する最新のもっとも要を得た解説になっている。

第三章は、本論文の中核となる部分であり、契丹語を研究するための基盤となる契丹語の音韻についてさまざまな方向から考察を加える。契丹語の音韻の再構は、契丹文字と漢字による表音資料を基礎的な対音データとして行われる。契丹文字で表記された中国語の発音は、契丹語の音韻体系にある程度適応したものであったと考えられるので、中国語のどの音韻の対立が契丹語において弁別的・非弁別的であるのかを暗示する。これに対し、漢字による契丹語の音写は、契丹語の音声が中国語話者にどのように認識されたかを反映し、契丹語の音素の音価を推定するのに重要な情報を与えてくれる。この点に注目して契丹語の音韻体系の再構を試みるのが論者の特徴である。これはまさに構造主義言語学の方法論を適用したものであり、従来の研究と異なり、かつ決定的に優れている点でもある。一つの例をあげる。論者は漢語の発音と契丹文字の対応を体系的に整理する過程で、漢語の初頭音を契丹文字で表記する際、後続する母音の等位によって文字を使い分ける現象は、軟口蓋の摩擦音についてのみ観察されることを発見した。それによって契丹語の軟口蓋音の子音調和はウイグル語のそれ

とは異なり、モンゴル語に見られるものと同じである事を明らかにし、その同じ子音調和がパクパ文字の体系にも反映していることを指摘した。

漢字によって契丹語を表記したデータにおける、漢字の初頭音の特異な分布は、契丹語における語頭・語中での音声的な特徴を反映している。例えば、語頭においては有気音・無気音のどちらも出現するのに対して、語中においては有気音の出現は極めて稀であることが指摘される。契丹小字によって表記された中国語音資料は、契丹語ではそれぞれの調音点に2種の阻害音があったことを示すが、漢字による音写はその対立が語頭でのみ存在したことを示唆する。これは従来全く指摘されていなかった点である。

このように論者は漢語の声母及び韻母と契丹文字の表記の緻密かつ網羅的な対照によって、きわめて帰納的に契丹語の子音や母音の体系を再構することに成功している。このようないわば共時的な研究以外にも、通時的な側面にも注目している。モンゴル諸語に見られる母音間の子音の脱落現象と並行する現象が契丹語にも見いだされることは知られていたが、契丹語資料の中から関連する語を網羅的にリストし、対応するモンゴル諸語の形式と比較しながら、この語族における契丹語の位置づけについても考察している。

論者の研究のもう一つの特徴は、契丹語を生きて話されていた言語として文法の全体像を記述しようとする一貫した態度であろう。文献言語学者としてのこの研究態度は、残りの三つの章にもよく現れている。従来はモンゴル諸語と親縁関係があるという認識から、文法組織とりわけ統語論を研究テーマにすることはまれであった。しかし論者は従来知られている事実を、一つの言語の文法の総体を記述するという観点でまとめ直し提出している。これにより、契丹語という言語について、音韻論以外の分野でどのような現象が知られまたどのような現象がまだ分かっていないかが一目瞭然となったことの意義は大きい。

この論文には、付録として本研究の基礎データである契丹小字で表記された漢語音の一覧、漢字によって音写された契丹語語彙のリスト、契丹語の語彙集、契丹文字テキストが添えられている。それらは、本論文を執筆するために論者が独自の観点で整理し直したデータであり、今後契丹語を研究する上での基礎資料になるものである。従って今後の研究に対する貢献は本論に勝るとも劣らない。例えば契丹文字表記の漢字音一覧は、中国語の音韻史を研究する上でも利用できるきわめて重要なものである。

以上に述べたように、本論文で論者は先行研究では見られなかった言語学的手法を駆使して契丹語資料を分析している。そしてこれまで報告されていなかった新たな知見が数多く提出されており、優れた研究として評価することができる。しかし問題が全くないわけではない。音韻論については詳細な分析がなされているが、形態論や統語論については初歩的な記述に留まり、言語の記述として十分なレベルに達しているとは言えない。ただその大きな理由は、現在の契丹文字の解読の限界によるためと

考えられる。今後の研究によって明らかにされるべき将来の課題でもあり論者の今後の研鑽に期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2012年10月25日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。